

第1回境島小学校学校規模適正化検討地区委員会意見集約

1 学校の存続を望む声

(1) 境島小学校及び境島村地域に対する愛着と自負

- ◆境島村地域、境島小学校に誇りを持ち、「この地域に住みたい、この学校に子どもを通わせたい。」と考えている人がいる。
- ◆境島小学校の歴史を残し、守ることが、我々この地域に住む若い世代の使命である。

(2) 少人数による教育のメリットを生かす

- ◆子どもの中には、少人数で教育を受ける環境が適している者もいる。
- ◆児童数が少なく、この先減少していく状況を心配しているが、少人数での教育にもいい面がある。例えば、少人数ゆえに誰もが何かの代表になり、それが自信につながる。

(3) 学校を存続するための提案

- ◆児童数を増加させる方法として、北小学校のように特認校制度を導入することを提案する。
一方、少人数での教育に不安を感じる場合には、他の学校に就学できるよう指定学校の変更に関する許可基準を見直すことを提案する。
- ◆学校を存続させる方法として、土日曜日に限り境島小学校を教育機関のほか観光資源として活用する。
 - ①社会科見学コースの設置：空き教室を利用して、養蚕用具等の展示、蚕の飼育の様子を見学してもらう。
 - ②ワークショップの開催：空き教室を利用して、伊勢崎銘仙や絹織物をテーマに開催する。
 - ③来訪者へのおもてなし：地元農家の主婦や伊勢崎興陽高等学校の生徒が空き教室や家庭科室を利用して、お茶・コーヒー・ケーキ等を提供する。

2 学校の統合を望む声

(1) 少人数による教育に対する不安や課題

- ◆小学校では、先生は進みの遅い子どもに学習指導を合わせてくれるので、落ちこぼれないが、中学校、高等学校へ進学した際に遅い子どもに合わせてくれないため不安がある。
- ◆中学校に進学した際、大人数での集団生活や学習指導方法などの問題により不登校になる子どもも出現している。
- ◆子ども同士のケンカ、その後の仲直りという機会は、他の地域に比べて少ないと感じる。

(2) 過小規模の現状を直視すべき

- ◆存続のみを考えていられない学校規模の状況にある。
- ◆教育の質の確保という点では、少人数の中で教育を受けることは子どもへの負担が大き過ぎる。児童数16人という規模は、もう限界に来ていると考える。
- ◆これから入学する子どもたちのことを考えると、現状の学校規模では教育の質がいいとは言えない。

(3) 友だちづくり・交流の現状

- ◆子ども会の会議において出された意見として、境小学校や境東小学校の子どもたちと交流をさせたいと願っている。この問題の検討に当たっては、子どもを育てているPTAの意見を最大限に反映させて欲しい。
- ◆学校だけの友だちづくりには限界があるので、習い事を通して他の学校の子どもと交流し、友だちづくりをしている。
(委員の皆さんは、「児童数がある程度いる中で質のいい教育を受け、いい時代を過ごしてきた。」と思う。)

3（学校存続）児童数増加のための方法を模索することを望む声

◆現在の過小規模の状態を黙認できないので、児童数を増やすための可能な限りの方策に着手すべきである。

①土地利用の見直し・規制緩和

②通学区域の弾力的な運用

◆この地域の発展のための起爆剤となるような政策を行政として打ち出して欲しい。

◆学校は地域の核であり、この地域にあることが大切である。学校の統合は慎重に行うべきで、その前に今できることを考えるべきである。

①特認校制度の導入

②土地利用上の規制緩和…都市計画法上の線引きの見直し、農業振興区域の見直し、市街化調整区域内の開発規制の緩和

◆教育の「教」は教える先生の姿、「育」は子どもたちが同じ教室で切磋琢磨し自立精神を養うことであり、一定規模の人数は必要である。

そのため、公営住宅の建設を誘致するなど、この地域として何か一步を踏み出さなければならない。

（世界遺産の構成資産が存在する地域として景観面での規制があるが。）

◆子どもの意見は、「境島小学校をなくさないで欲しい。」で、親の意見は、「少人数での教育には限界があり、中学校に進学した際に不安が残る。」である。そのため、自然な形で人口増加が見込める方策を考えるべきである。

◆学校規模が適正に向かうような見直し策を見つけることが大切である。

◆何が何でも学校を存続させたいのではなく、可能な限りの手段を尽くしてなお子どもの数が増えないのならばあきらめがつく。

そのため、例えば、人口の増加を見込めるよう土地利用上の規制を外すなど。

◆この地域の人口を増加させる努力をしてから、学校規模の適正化を図るための具体的な検討に入るべきである。